

対日猜疑心の原点

イヤハート事件の真相解明にご協力を

平間 洋一

一 イヤハート事件の概要

第二次世界大戦前の昭和十二年夏、「女性リンドバーグ」といわれたアメリカ・イヤハートが世界一周の飛行中に太平洋上で消息を絶った。イヤハートは一八九七年、アメリカのカンザス州に生まれたが、一九二八年には女性として初めて大西洋横断飛行に同乗、一九三二年には自身による大西洋単独横断に成功するなど冒険飛行を重ねていた。

世界一周飛行に飛び立ったのは一九三七年六月一日で、イヤハートはロッキード社のエレクトラ機に男性航法士と搭乗し、マイアミを発ちベネズエラ、ブラジル、アフリカ大陸、インド、ビルマ、シンガポール、オーストラリアなど二十一カ所を経由し、六月三十日にニューギニアのラエに到着した。そして、七月二日にラエから四千キロ余離れた太平洋上のハウランド島に向かった。

しかし、離陸から十九時間十二分後、同島で待機していたアメリカ沿岸警備隊「アイタスカ」号に「われわれはあなたがたの頭上に

いるはずなのに島を発見できない。燃料が減少している。高度一、〇〇〇フィート」との連絡があり、その後に「われわれの方位を探知して三一〇五キロヘルツでの音声通信を頼む」との通信があり、さらに、離陸から二十時間十四分後、「一五七―三三七度の線上を南北に飛行中」とのメッセージを最後に消息を絶った。

当時、この事件は世界的関心を集め、アメリカ海軍はこの一民間女性飛行士の遭難に戦艦コロラド、航空母艦レキシントン、駆逐艦十隻、飛行機百二機、捜索派遣人員三千人以上、経費は少なく見ても四百万ドルを越える大規模な捜索を行なったが、ついに何一つ発見できなかった。

そして、最後にアメリカ海軍は「イヤハート機はハウランド島北五十マイルか、三十マイルの地点で島を見失い墜落した」と結論した。しかし、その理由は公表されることはなかった。そして、そこから対日疑惑と猜疑心が生まれ育ったのであった。

二 事件と対日猜疑心との関係

この事件に日本海軍は自発的に協力を申し出て、当時、南洋群島方面を行動中であった特務艦「膠州」を派遣した。しかし、この協力がその後「日本軍による救助説」を生み、裏目に出してしまった。

イヤハート事件に日本海軍がかかわったとして最初に大きく取り上げられたのは、第二次大戦中の昭和十八年で、ロザリンド・ラッセル演じる女流飛行家が、日本統治領の要塞化の状況を偵察する密命を帯びて飛行し消息を絶ったという戦意高揚映画『自由への飛行』であった。

次は戦後の昭和三十五年で、アメリカの空軍大尉が、イヤハートはサイパン島に不時着陸し、日本軍に捕えられてスパイとして処刑されたと島民から聞いたと発表した。続いて昭和四十五年十一月には、イヤハートは戦争中は宮中にかくまわれていたが、天皇ヒロヒトを軍事裁判にかけないという交換条件で釈放され、現在は別名で生きているという途方もない本が出版された。

そして、それから約十年後の昭和五十六年には、日本海軍の水上機母艦「神威」が救助したが、南洋群島要塞化の秘密が知られてしまったため日本海軍が処刑したとの説が流れ、このため、現在でもサイパンで配布されている観光案内地図の刑務所跡の説明文には「一説によると、イヤハートがこの鉄格子の中に捕えられていたとのこと」と記されている。次いで、昭和六十年には『アメリカ・イヤハートの最後 (Amelia Earhart: The Final Story)』が、昭和六十三年には『アメリカ・イヤハート事件 (Amelia Earhart Incident)』



アメリカ・イヤハート遭難 50 周年記念切手として、1987年にマーシャル諸島共和国で発行された切手。4枚1組の1枚で、他の3枚の図柄は、ラエを離陸したイヤハート機、ハウランド島で待機する米沿岸警備隊の「アイトスカ号」、ミリ環礁に不時着したイヤハート機である。 写真：松永秀夫

昭和六十三年には『アメリカ・イヤハートの悲劇 (The Odyssey of Amelia Earhart)』など、日本軍がイヤハート事件にかかわったという本が続々出版されるに至った。

さらに、昭和六十二年には写真に示すように、沖で日本海軍の特務艦「膠州」がイヤハート機を収容している一方、岸辺では憲兵がアメリカ・イヤハートと航法士を捕えている図柄のイヤハート遭難五十周年記念切手がマーシャル諸島共和国から発行され、さらに本年五月八日にはNBC放送から、「未解決のミステリー」と題して、日本軍関与説が特集番組として放送された。

イヤハート事件を詳細に分析すると、イヤハート処刑説が初めて外電に出たのは「安保闘争」が火を吹き、アイゼンハワー大統領の訪日直前になって中止された昭和三十五年であり、次いで皇居内にかくまわれていたとの節が流れたのは日米安保改定の七十年安保闘争の翌年であった。また、「神威」救助・処刑説が出たのはアメリカの対日赤字が百八十億円に達し、経済摩擦が叫ばれ出した一八八一年であった。

このようにイヤハート事件を詳細に眺めると、この事件は日米関係の悪化とともに復活し、対日感情が悪化するとアメリカ人の心を捕らえ、関心が高まる傾向があるように思われる。

三 イヤハート事件解決にご協力を

一方、アメリカにはただ真相を明らかにしようとの動機から、民間からの寄付で真相解明活動を続けている航空考古学の団体TIGHAR (The International Group for Historic Aircraft Recovery: 本部デラウェア州ウィルミントン) がある。

この団体は、当時、ハウランド島で待機中だった米沿岸警備隊の「アイタスカ」号とイヤハート機との交信記録や、遭難後のイヤハート機からの電波に対するパン・アメリカン航空による方位探知記録などから、イヤハートはフェニックス諸島(キリバス共和国)のニクマロ環礁付近に着陸した可能性が高いと分析し、一昨年の現地調査で航法士用の本棚を採取した。

しかし、それが遭難したエレクトラ機のものであると確定できなかったため、本年はさらに装備を充実し、再び九月に陸上および海中の調査を実施する計画で資金を募集中である。

TIGHAR(タイガー)の理事長のリチャード・ギルスピー氏は「この調査で日本軍の関与説が間違っていることが証明されるであろうと期待している」と語っているというが、このようにアメリカには、結果的に日本人にかけられた疑いを晴らすことになる調査に、真実は明らかにすべきだとの信念をもって身

銭を切り、アメリカ国内で寄付を集めている人たちもいるのである。

このプロジェクトにはアメリカ海軍やFBIも協力し、本年はかなりの成果が期待できそうなことから、この調査にNBCのスタッフが同行し十月には二時間の特別番組が全米に報道される予定である。

イヤハート事件は前述のとおりアメリカの対日不信感や反感が高まり、日米関係が悪化するたびごとに息を吹き返す傾向がある。湾岸戦争が終わり一三〇億ドルを援助しながら、アメリカには反日感情と対日不信感が強まりつつあり、このままでは日米関係に悪影響を及ぼす恐れがあると指摘する人もいる。今、大事なことは、たとえ小さなことでも、アメリカ人の対日不信感・猜疑心を解消することではないであろうか。

結果的には日本の疑いを晴らすことになるこの活動を行なっているアメリカのボランティアの人々に、今日の日米関係をご考察の上、暖かいご協力をいただけるならば幸いです。われわれの小さな善意で、少しでも日米関係を円滑にしようではありませんか。

なお、ご寄付の送り先は次の通りです。

郵便振替口座 東京三二九七七二 タイ
 ガー支援会、または富士銀行赤坂支店 普通
 預金一五〇一三三二一 太平洋学会タイガー支
 援会

お知らせ

スペイン太平洋研究協会から、在日スペイン大使館を通じて、当学会に対し、左記二冊の寄贈がありました。

ご希望の方(太平洋学会会員に限る)には、二週間を限度として借し出しをいたしますので、お申し出ください。

“España y el Pacifico,” Madrid, 1989.

“Estudios Sobre Filipinas y las Islas del Pacifico,” Madrid 1989.

